

仏像について 01

こんにちは、ナビゲーターの金子です。

ご講話を頂いております齋藤友巖和尚のお寺、萩生寺には地下霊場があり、約110mの地下道に西国三十三観音霊場のご本尊さまと四国八十八ヶ所霊場の木彫のご本尊さま121体が納められています。以前から抱えてきた「仏像の疑問」に、金子がせまってみます。

「お地蔵さん」「お不動さん」ってなに？寅さんの映画に出てくる「帝釈天」、大きな寺院で見かける「金剛力士」、七福神の一つの「弁天さま」ってなに？と多くの疑問がありました。あなたは答えられますか？

何冊もの仏教本を読んだ結果、まず仏教の世界観を押さえることが必要でした。神様仏様の構図とも言えますが、仏教の理解にもつながると思うので説明してみます。

釈迦が亡くなった後、仏教が教団組織になるにつけ様々な理論が追加されていきました。そしてインド古来の思想『輪廻転生』が基本となって「あの世」が細分化され、いわゆるヒエラルキー、ピラミッド型の階層ができます。

ここでとても大切なことですが、このヒエラルキーは釈迦が望んだことではありません。「縁起」を説いた釈迦にしてみれば受け入れがたい思想であり姿でした。

しかし一般的な仏教をみると、この世界観なしには理解できないことがたくさんあります。伝統的な仏教の世界観はそういったものなんだと大きな心で捉えて下さい。

まず世界を、と言いますか仏教宇宙は大きく「仏界」と「六道」に分けられます。

「仏界」とは、浄土、イメージとしては天国の世界で、次にあげる六道から脱することで行ける世界です。そしてそこには如来と菩薩がいます。

「如来」は悟った人で神様のイメージです。

「菩薩」は自らの悟りを求めると同時に多くの人々を救う使命を持っています。

次に「六道」ですが、こちらは仏教が説いている死後に生まれ変わる6つの世界で天道、人道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道があります。

『輪廻転生』とは死んだあと、別の生命に何度でも生まれ変わるという考え方です。人が生きているのは人道ですが、生前の行いによってどの世に生まれ変わるかが決まると

され、罪の重さによって畜生道、餓鬼道、地獄道に転生、苦しみを与えられます。

六道のうちの最高の世界である天道は、天部とって、バラモン教の神々が住んでいる苦しみのない世界ですが、天道でも寿命には限りがあり、死後は別の世界に転生の可能性があります。バラモン教の神々の登場に疑問を持たれると思いますが、仏教の前にあったインド土着の宗教との融合があったわけです。

こうした輪廻転生の苦しみから解放される唯一の方法が、仏教を信じて悟りを得ることであり、この解放を『解脱（げだつ）』と呼びます。解脱した人は如来によって仏界、浄土とも言います、に導かれます。ところで自力で解脱することは難しいため、菩薩は六道をまわって苦しむ人々を救うとされています。

もう一度整理しますが、まず仏教宇宙は大きく「仏界」と「六道」の2つに分けられる。上位の「仏界」には、「如来」と「菩薩」がいます。

下位の「六道」は、人間が死後に生まれ変わる6つの世界で天道、人道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道があります。そして仏界にいる菩薩は、六道で苦しむ人間を救う役割を担ってくれている、というものです。

そしてこの構図は、釈迦本来が望んだことではなく、仏教が大きくなるにつけバラモン教などの思想も取り入れつつ形づくられた、現在仏教の世界観であります。

明日は仏像の4つのグループについてお話してみます。